東京定例会合報告　2014 年 10 月 11 日開催

文責　平山雄大（GNH 研究所　東京事務局）

●概要

- 日時：2014 年 10 月 11 日（土）　10:00～12:00
- 場所：早稲田大学　16 号館 606 教室

●内容報告

今回の東京定例会合は GNH 研究所の会員からの問題提起・発信という新たなスタイルを試み、会合前半部分において、高畠淳氏より「月を眺める幸せ、月に行く幸せ。」というタイトルでご発表いただきました。

ご発表では、近年注目を集めている「コンサマトリー化」、「ダウンシフト」といった用語に焦点が当てられ、関連する参考図書（高坂勝（2014）『減速して自由に生きる―ダウンシフターズー』ちくま文庫、Erich Scheurmann（2009）『パパラギ―はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集―』ソフトバンク文庫、古市憲寿（2011）『絶望の国の幸福な若者たち』講談社、同（2014）『だから日本はズレている』新潮新書）から得た気づきをもとにしたご自身の考察に関してお話いただきました。「コンサマトリー化」は「自己充足的」という訳語があてられ、目標に向かって努力するよりも今を楽しく過ごすことを重視する傾向を指す言葉であり、「ダウンシフト」は、過度な出世競争や長時間労働、欲望に満たされた日常生活から脱してゆとりある生活へと「減速」する生き方を意味していますが、「限界値を下げているだけではないのか？」、「逃げの言い訳ではないのか？」といった批判的検討も入れつつ、そこに存在する既存の価値観（「幸せのモノサシ」）との葛藤についてご指摘いただき、それを受けて会合後半部分のワークを実施しました。

個人的に印象的だったのは、平穏な心の安定を求める幸せ（「月を眺める～」）と、欲求・欲望（知的好奇心・開拓）を満たす幸せ「月に行く～」はどちらも否定することができないというご指摘です。言われてみれば確かにその通りで、二項対立の図式で無理矢理自分の立ち位置を決め、どちらかを鼓舞する／どちらかを否定する必要はなく、個人個人それぞれの両立の仕方があり、またその両立の仕方を探るヒントを提供することが GNH 研究所の存在意義のひとつでもあるのかなと感じました。

発表終了後には、「「コンサマトリー化」と「足るを知る」という用語のニュアンスの違いはあるのか？」、「一昔前と今では個人の欲求／社会の欲求の出発点が違うので、モデルを一般化することは難しいのでは？」といった質問・意見が参加者から投げかけられました。後半のワークでは、参加者各自の価値観をもとに幸せを感じること（とき）を思いつく限り挙げ、それらを共通項で括ることを通して、「幸せのモノサシ」が作れるかどうかを試みました。